

困っている人に、お寺ができること。

日蓮宗 大法寺



日蓮宗 法鏡山 大法寺

僧侶の人柄記事

大法寺

〒252-1107 神奈川県綾瀬市深谷中6-23-1
daihouji52@circus.ocn.ne.jp

大法寺のメールアドレスは右記の
QRコードからアクセスできます。



ご相談の際は、お気軽にご連絡ください。
受付：午前9時～午後5時

TEL 0467-78-0103



大法寺

困っている人に、
お寺ができること。

日蓮宗 大法寺

菊池 重忠

Interview

僧侶インタビュー

01

インタビュー・文＝
DIALOGUE TEMPLE
編集長 池谷正明





神奈川県綾瀬市にある大法寺は、街の名所となればという想いから建立されたピラミッド型の永代供養墓で有名である。その大法寺の住職が今回話を伺った菊池重忠(きくち じゅうちゅう)だ。僧侶になった後に、日蓮宗の宗務院に勤務したことが価値観に大きな影響を与えたという。「他者に尽くすことが自分の使命」と語る菊池住職とは、いったいどんな僧侶なのだろうか。

.....

天命と受け入れ仏教の道へ

菊池は大分にあるお寺の6人兄弟の末っ子として生まれた。お寺のお手伝いをすることはあったが、兄がいたこともあり自身は僧侶になる気はなかったという。「将来の進路を考えるなかで漠然と東京に

行きたいなと思っていたら、父は宗門大学である立正大学へ行きなさいと。僧侶になるつもりはありませんでしたが、歴史が好きで文学部が有名だったこともあり進学しました」。仏教学部ではなかったが、お寺の子ということで宗立学寮に住むこととなった。まわりの学生の多くが得度をし、僧侶になるために来ているなか、菊池を待っていたのは厳しい上下関係と勤行だった。「実家の手伝いをしていたとはいえ、できないことが多すぎてショックを受けましたね」と大きな挫折感を味わったという。僧侶になりたいと入学してきたまわりの学生が修行生活から何人も辞めていくなか、菊池は逃げたくなかったという。「父が宗門の役職に就いていたこともあり、当時は逃げ出すことを負けだと感じていたんです」と当時の感情を話してくれた。

卒業も間近になり、将来の進路を考えていた時に父から宗務院で働かないかと誘われたそうだ。「自分では開拓精神がないとも言えるのですが、訪

れた現実を天命として受け入れるのが答えだと考えていました。そんな性格を父もよく見抜いていたのだと思います」。そうして宗務院で働くことになった菊池は「日蓮宗総合相談所」という部署の配属になったことで大きな転機を迎えた。

自分の使命に気づいた瞬間

菊池が配属になった宗務院の総合相談所は、全国から日蓮宗に届くお問い合わせや相談事の対応をする窓口になる部署だった。「今まで人と話をするのも苦手だと思っていたくらいなので最初は嫌でした」という菊池だが、全国から集まる悩み事に答えるうちに気づいたことがあった。「これはお寺で僧侶



がやっている仕事と同じだと。そして毎日相当な数の相談をこなすうちに、自分は人の話を聞くのが好きだと気づけました」。多くの人に頼ってもらえたこの経験が自己を磨くのに大いに役立ったという。菊池はこの時、他者から頼られることによって初めて自分が形成される、という境地に辿り着いたそうだ。「今までの生き方も自分で決めてきたんじゃなく、気づいたらそんな選択をするようになってただけで。たくさんの誰かからの縁やつながりに導かれてきました」。他者との関わりのなかで自分自身の価値や存在を認められるようになった菊池は「他者に尽くすことが自分の使命だ」と悟ったという。

その後、菊池は大学時代に苦楽をともした友人から「大法寺というお寺が跡取りがいなくて困っているから手伝ってみないか」と誘われた。「最初是我分がお寺を引き継げるのか不安を感じましたが、それでも困っているなら力になってあげたいと入寺を決めました」と副住職として2010年に入寺し、2014年に継職し住職としての道を歩み始めたのだった。

自分自身で決める「受け取り方」

縁もゆかりもなかった菊池が跡継ぎとして入寺したことで檀家の方々はどのように変化したのだろうか。「みなさんまずは一安心といった様子で。若い後継者が来たということで、何か安心された顔で話しかけてくださいましたね」。檀家にとって後継者問題は自らのお墓が残るか残らないかに直結する問題だと気付いたそうだ。

菊池が月参りなどで伺った時に「私でもう世代が終わってしまうのだけど、永代供養墓は作らないのか」と一定数の檀信徒から聞かれた。それを先代住職に相談したところ「私は引退する身だから、君の代は好きにきなさい」と伝えてくれたそうだ。もともと大法寺は人手が足りないこともあり、檀家以外は相手にしない会員制のような空気感があったそうだ。しかし、菊池は今の時代はお寺を開かれた場所にし

なければいけないと感じていた。「地域の中にあるお寺は本来公共性のある場所であり、公益的なこともやらなければいけません。悩みがあれば誰でも来ていいんだ、という場所にしたいかったです」。

菊池は永代供養墓としてピラミッド型の永代供養墓「びらみ堂」を建立し、檀家以外の人でも契約できるようにした。「まずは永代供養墓を用意し、相談してくれた檀家さんに安心してもらいたかった。街のシンボルになるような外見であれば、檀家さん以外にも大法寺を知ってくれるきっかけにもなると思いました」。しかし、外部から来た跡継ぎがすべての人に場所を開いていくことに、反発の声もあったという。

「そもそも後継者が外部から来たことに対しては快く思わない人がいるのも当然で。厳しい意見をいただいたこともありまして」。そうした声を受けた時、変化を続けることが怖くなることはないのかを尋ねると菊池は『第二の矢』の話をしてくれた。「お釈迦さまが弟子に『仏教を知っている人と知らない人の違い』を聞かれた時に、仏教を知るものは第二の矢を受けないと説きました。第一の矢は起きた現実や感情。そして第二の矢はその現実や感情から生まれてしまう悩みや苦しみ。現実で起こった事実を受け止めることが大切であり、そこから生まれるものに振り回される必要はないのです」。菊池が住職になり、開かれたお寺を目指す事実に対して、いろんなことを言われることもあるが、それを受け入れるかどうかは自分次第だと教えてくれた。

「びらみ堂」はテレビなどで取り上げられ、さらに寺で保管されていた仏像を修復し、その結果綾瀬市の文化財として指定されるなど、変革は止まることなく続いている。「『大法寺知ってる。ピラミッドのお寺でしょう』『文化財のお寺だよね』と言われるようになりました。お寺の認知度が高まることで、檀家さんも少し誇らしく思われていると感じています」。さらに菊池は地元の青年会議所に入ったり、保護司や地域のPTA役員もやっている。自分自身がいろんな役職をやり、いろんな人と交流することで大法寺がさらに開かれた場所になることを目指している。



上／ピラミッド型の永代供養納骨堂「びらみ堂」(奥)と、ペット墓(手前)。
下／人の悩みの根本はお寺で解決できると話してくれた菊池住職。

悩みの根本は全てお寺で解決できる

「多くの方が悩まれていることは、すでに形があって答えも決まっていると思っています。その悩みの根本はお寺で全部解決できると信じています」。人の悩みの多くは、他の人との関わりから生まれていて、自分の中で問題を作っている。菊池はその悩みに仏教の立場からどういう解決ができるか顔を合わせ何回も伝えている。お寺は困っている一人ひとりに合わせて解決できる場所だという。「いろんな宗派がありますが目指すところは一つだと思うんです。私のところに相談に来た人が他のお寺が向いてそうであれば構

いません。それで良いと思います」。

それでもいま多くの若者が自ら命を絶っている現実には菊池は心を痛めている。「一人で答えを出し過ぎですよね…。もっと地域の大人たちでも救えないのかと、僧侶として本当にもどかしさがあります」。だからこそ菊池はお寺が困りごとや悩み事を解決するためにお坊さんがいて、お寺があると伝えていきたいのだ。「どんな些細なことでもいいから困ったことがあったら、なんでも聞いてください」。